The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「地続き」の思考の痕跡 ： 普通の人びとの日常的な「もののやりかた」
Author(s)	井本, 恭子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2009, 43, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「地続き」の思考の痕跡

―― 普通の人びとの日常的な「もののやりかた」――

井　本　恭　子

Ⅰ　はじめに

雷鳴におびた老女が唱える呪文「聖女（サンタ）バルバラ！」、「今日は聖（サン）ジョヴァンニの日、おめでとう」とその聖人と同名の男の子にかけられる祝いの声、「雨乞いのときに担ぎ出されたこともあった」という聖（サン）ミケーレ像、「司祭（パードレ）さまからいただいたの」といって見せられた聖母マリアの小さなメダル、サルデーニャ島の村々で見聞きした聖人やマリアをあげればきりがない。事実、イタリアは「在地化」された聖人やマリアであふれているし（教会、礼拝堂、祠が多いという視覚的な意味で）、生活世界のさまざまな情況に個人レベルでも集団レベルでも伸縮自在な姿をして現われているようにみえる。

このような聖人やマリアの複数性、多様性は、カトリシズムという「大きな物語」からの単なる流出、派生、すなわち一般性に対する特殊性と捉えるべきだろうか。超自然的な力の信仰という土着のものを排除と同化を巧みに使い分けながら、不動の中心に回収していったのだと解釈すれば、それがカトリシズムの「合理性」、「同一性」と言えるのかもしれない。異質なものが雑居する周縁を統治権力のおよばない不可視の空間へと排除するのではなく、聖人やマリアという媒介者を創りだすことによって、統制・監視の可能な空間に変容していったカトリシズムの物語となる。つまり、空間の分配と階層化を伴う権力装置による分有作用、全体－部分の階層的

な包含関係、多様性の保障だと説明すればよいのである。確かに、支配システムのロジックはそうなのだが、フィールド ― 普通の人びとの暮し―を思考の場とする者にとっては、そうした同一性を前提とした差異の解釈にどうしても「ひっかかり」を感じてしまう。生活世界で人びとが向う聖人やマリアは、一つ一つ明確に区別できる関係性の束や役割の集合というよりも、そのときどきの心的状況に応じてふと現れる、多様な役割関係の連続体あるいは連鎖としか見えないからである。生活世界で実践される支配システムの「領有」あるいは意味作用には、固定された中心に向わない複数性を予測させるのである。

そこで本小論では、カトリシズムという「一般性」に対する「特殊性」と解釈されるセディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為をもとに、支配システムのロジックのパロディに見える使用する側の「操作ロジック」― 規範を利用した創意工夫の形式 ― を素描し、同一性をもったふたつの異なる表現の対立としてではなく、同一資源へのアプローチや用い方の違いとして、つまり「二層性」ではなく「二重性」として捉えてみたい。ただし、ここで扱うのはあくまでも「人々が日々の生の営み、歴史的にそれを集積してきた生活世界」（松田［2009：301］） において実践される奉納行為にあらわれる「操作ロジック」であって、固有性の名のもとに実際にそうした操作や行為に直接かかわる人びとや地域を実体的に捉えるものではない。

このような試みは「普通の人びと」の日常的実践を過大評価し、凡庸な反復作業にすぎぬものを違ったふうに見せようとしているだけなのかもしれない。だが、「外部」という出口がもはやない以上、「地続き」の思考（レヴィ=ストロースのいう「野生の思考」）の痕跡をたどろうとすれば、異質なものをロマン化せぬよう気をつけながら、人びとの日常的実践の相対化に向うしかないだろう。それは自己の生きる世界の自明性を解体する可能

性や共同性を問うことにもつながるはずである。まずはその「序文」を書いてみることから始めるのも無駄ではあるまい。

Ⅱ　日常的な「もののやりかた」

1　素材選び

冒頭でも述べたように、本小論では「普通の人びと」の日常的実践にあらわれる「操作ロジック」を扱うのであって、ある地域に生きる人びとの具体的な実践そのものを固定化するものではない。「民衆」「大衆」ではなく、あえて「普通の人びと」という言葉を使うのも、「民衆文化（ポピュラー・カルチャー）」や「大衆文化（マス・カルチャー）」や周縁性をめぐる諸研究から ― 学ぶべきところは多いとしても ― はずれたところで日常的実践を問うためである。「普通の人びと」には「意味の消化」装置だけがある。つまり、「〈世界〉とか〈歴史〉といった意味の奥行き、積分する理念のようなものに向けられる垂直の視線」の残響も自己規定の「点火装置」もないからである（真木［1995：142］）。

では、その「普通の人びと」の日常的実践として、セディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為に注目するのはなぜか。少し遠回りになるが、素材選びのヒントを与えてくれたグラムシとド・セルトーの思考の断片を継ぎながら、その理由を述べてみる。

グラムシは信心、祭、俗信、言い伝えなど、人びとの暮らしに伝わる雑多なもの、いわゆるフォークロアを「奇妙きてれつなもの」ではなく、支配層や国家の均質で首尾一貫した「世界観 concezione del mondo」とは異なる、実生活に即した「世界観」のあらわれ、すなわち人びとの「見かたとやりかた」として概念化する（Gramsci［1950：215-221］, Cirese［1976：95-97］）。さらに、それは現実に応じるための「自然な哲学 filosofia spontanea」というロジックであり、あらゆる社会形態の従属的階級 ― 「民衆（ポーポロ）」― を規定していると述べる。たとえば、同じカトリシズムといっ

ても農民のカトリシズムもあれば、都市のプチブルや労働者のカトリシズム、女たちのカトリシズム、知識人たちのカトリシズムもあり、具体的な行為自体はばらばらで整合性に欠けるように見えるが、「見かたとやりかた」を基準にすれば、異なるふたつの「世界観」があらわれ ― 「科学的な哲学 filosofia scientifica」と「自然な哲学 scienza spontanea」― として捉えることが可能になるということである（Cirese ［1976：97-98, 102-103]）[1)]。

では、同一性をもった文化的差異として集団に固定化することも、その支配-被支配の力関係を隠蔽することもなく、このような「ふたつの世界観モデル」をどう「領有」するのか、「普通の人びと」の「自然な哲学」への迫りかたが問われる。そこでド・セルトーの日常的実践論につないでみる。

> ここであつかおうとしている問題は、操作の様態や行動のシェーマにかかわるものであって、実際にそうした操作や行動をおこなったり担ったりする主体に直接かかわるものではない。明らかにしようとめざしているのは、ある操作のロジックなのであり、そのモデルを求めようとすれば、姿を変える魚だとか、変幻自在な昆虫だとかが幾千年もの昔からそなえてきた狡智にまでさかのぼらなければならないだろう。いずれにしろそれは、いまや西欧を支配している合理性によって神秘化され、見えなくなってしまったロジックなのである。....ひとつの「文化」を構成しているさまざまな操作の組み合わせを明るみにだすことであり、使用者に特有の行動モデルをほりおこすことである。この使用者には消費者という遠まわしな名があたえられていて、被支配者という位置（スタテュ）がおおい隠されてしまっているのだ（被支配者といっても、受動的とか従順とかいう意味ではないが）。日常的なものは、無数の密猟法からできあがっ

ているのである（ド・セルトー［1987：12］）。

ド・セルトーにならって、押しつけられたシステムを無意識かつ反復的に「ある一定のやりかたで利用する」ことを日常的な「もののやりかた」と呼び、その利用者である人びとの「受動的能動性」による操作とそのロジックを対象とすれば、少なくとも同一性をもった実体的な主体や属性を異質なものとして対立させるような二層モデルに陥ることも、支配-被支配の力の非対称性を隠蔽することにもならないだろう。このような前提のもとに、本小論で扱われる日常的実践の素材は選ばれている。セディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為に注目するのは、それが情況に応じて付与される様態、すなわちカトリシズムに対する人びとの「受動的能動性」による「即興」であり、そこには「いろいろな情況のタイプに応じて行動を変えるゲームのロジック」が存在すると考えられるからである（ド・セルトー［1987：77］）。

2　「戦術」、「ブリコラージュ」

日常的な「もののやりかた」、人びとの操作プロセスにロジックがあらわれるとすれば、その操作形態を問わねばならない。ド・セルトーは「もののやりかた」を「戦略」と「戦術」のふたつの操作タイプにわけ、前者をある意志と権力の主体（企業、軍隊、都市、学術制度など）固有の場所からの一望監視の「もののやりかた」、後者を支配的な市場経済に押しつけられた多様な製品の消費によってしか自己をあらわすことができない、現代社会の消費者の「もののやりかた」だと説明している。

> こうした戦略に対して....、わたしが戦術とよぶのは、自分のもの〔固有のもの〕をもたないことを特徴とする、計算された行動のことである。ここから外部と決定できるような境界づけなどまったくできないわけだ

から、戦術には自律の条件がそなわっていない。戦術にそなわる場所はもっぱら他者の場所だけである。したがって戦術は、自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地、他から押しつけられた土地のうえでなんとかやっていかざるをえない。戦術には、身をひき、先を見越しつつ、身構えながら、自分で依って立つということができないのである。それは、....「敵の視界内での」動きであり、敵によって管理されている空間内での動きである（ド・セルトー［1987：101］）。

日常的な「もののやりかた」、すなわち超越的な高みの足場から押しつけてくる空間で、「周囲」から身をひきはなさず、規定のコードをもっぱら「領有」することしかできない「普通の人びと」の実践は「戦術」である。カトリシズムに対する人びとの「即興」であるセディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為も、場所の非-自律性ゆえに「戦術」と言えるだろう。ただし、ド・セルトーの説明では、戦略／戦術という「もののやりかた」の違いが強調されるあまり、「戦術」が一方から他方への変換操作であることが見えにくくなっている。日常的な「もののやりかた」が「戦術」だと言うとき、それが本来の意味あるいは機能を与えられているものの「引用」、すなわち意味作用だということが重要である。つまり、「ブリコラージュ」でなければならない。宮川淳が正しく指摘しているように、「ブリコラージュ」はあり合わせの手段でアレンジすること、すなわち単なる「寄せ集め」ではない。

ブリコラージュが（レヴィ=ストロースによって記述されるとき）本質的に引用であるという事実ではないだろうか。

ブリコラージュは分析と綜合の二重の操作によってわざわざつくり出すことを節約するのではない。逆にブリコラージュがちぐはぐな総体であり、全体化とは別の原理であるのは、いいかえれば≪本≫の観念のパ

ロディであるのは、それがつくることの省略、つまり引用だからである（宮川［1975：103］）。

「ブリコラージュ」は、つねに「全体化の観念（技師の素材＝シニフィアンは計画＝シニフィエによって規定される）」として現れる「テクネー」（単なる技術ではない）に対してであること、その文脈をつねにずらして書き入れることである。つまり、「構成されたさまざまな全体から雑多な要素をひき出し、これらの異質な要素から出発して、ひとつの新しい全体を構成」するという分析‐綜合を前提としない、「引用」なのである。日常的な「もののやりかた」がシステムに対してであり、自分の固有の場所をもたない「戦術」としてあらわれるとすれば、それは「ブリコラージュ」にほかならない。宮川淳の「引用」へのこだわりは、日常的な「もののやりかた」に注目する本小論の問題意識でもある。

だがなぜ引用なのか。引用について考えること、それは読むことについて考えはじめることだ。読むとはアルケー、一なる全体、≪本≫へ送りとどけられることではない。それは逆に還元不能な複数性、くりかえしと差異について考えることだろう（宮川［1975：117］）。

Ⅲ　「領有」する人びと

1　奉納行為

セディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為は、つねに「機会」とむすびついた非-自律的なものであり、「ブリコラージュ」の観念として現れたものである。だからそこには、人びとの無意識かつ反復的なカトリシズムの一定の利用のしかたが刻印されている。その操作の痕跡を読みとるために、まずは人びとの実践する奉納行為を概観してみよう。

祈願後の感謝、誓願を果たすしるしとして納められたモノを ex voto（エクス・ヴォート）と呼ぶのだが、その奉納先はカトリックにおいては、神ではなくマリアや聖人である。人びとは日常のさまざまな局面に聖者を介入させ、その呼びかけに応じてくれた返礼を奉納行為によって示すのである。もっとも、お礼を何らかの形で表すという点では、巡礼、聖祠の建立、祭りなども奉納行為の一種であるから、ex voto（エクス・ヴォート）はそのうちのひとつにすぎない。

現代の一般的な ex voto（エクス・ヴォート）は、中心に十字が刻まれたハート型の鋳物で、そのハートのうえにリボンがかけられているが、メッセージや奉納者の写真が添えられている場合もある[2)]。このように規格化された ex voto（エクス・ヴォート）のほかに、脚や耳や手をテラコッタ、銅、蝋、木ぼりで象ったもの、tavoletta votiva と呼ばれる奉納絵などがあり、地域や時代によって素材も形態もさまざまである。変らないのは、「救われた」瞬間（年月日）、「救われた」人の名前、「救ってもらった」聖人名が、何らかの形 ― 文字や図像 ― で明示されていることである。ex voto（エクス・ヴォート）に、いつ、誰から誰に「恩恵 grazia」「奇蹟 miracolo」があたえられたかを語らせると言ってもよい。教会側は、そのような慣行を「異教的な風習」と見なしつつも、完全に排除することなく、最終的には聖人崇敬というカトリシズムの文脈で、典礼とは異なる「民間信心 pietà popolare」の名をあたえて同化してしまう。いい換えれば、キリスト教以前の超自然的な力を徹底的に言語化させたのち、回収できるものだけ、ツリー状の位階構造で機能する聖人に変換させたのである。

セディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為も、一元的なシステムから俯瞰すれば、「民間信心」という名のもとに保障された、多様性のひとつと見なされる。これはマイノリティ管理の機能と同じである。つまり、ひとつの図形の縮小図になってしまうのである。しかし、モノによる返礼という点に着目すれば、そこにはカトリシズムの文脈からのズレがみえる。

実際、中心が固定される再分配の形式では、神→聖人→当事者は従属関係となる（図１）。ゆえに、モノによる返礼の義務は生じない。一方、セディロの聖コンスタンティヌスへの奉納行為にみられるのは、再分配と限定交換の組み合わせ形式である。これは再分配の一部を変換して、聖人→当事者→聖人の相互依存（連帯）関係を創りだしている（図２）。返礼の義務が生じるのはこのときである。

このように生活世界で実践される奉納行為は、中心のことなる写像の合成として現れている。それは人びとが実践するカトリシズムのコードを使った変換操作の痕跡にほかならない。さらに、奉納行為の非－自律性を考えれば、返礼の引きがねになるものがあたえられるはずで、そこにも人びとの「もののやりかた」の痕跡をみることができるだろう。

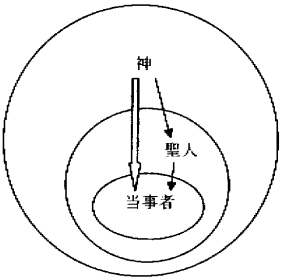

図１：再分配

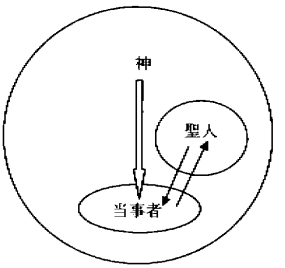

図２：再分配と限定交換

「最初の贈与」：神⟹ 当事者

「恩恵」「奇蹟」：神⟶ 聖人 ⟶ 当事者

ex voto：聖人⟵ 当事者

2　「救済のドラマ」

ここでは、人びとの奉納行為によって語られるものを「救済のドラマ」と呼び、その語りを整理することからはじめたい。

発端：不測の事態（病気、事故、天災など）
↓
展開：聖コンスタンティヌスへの祈願（名を呼んで祈る、想起）
↓
結末：聖コンスタンティヌスの介入による救済（命拾い）

すべては切実な経験からはじまる。つまり、不慮の災害による緊張事態 ― 自己の生命の危機 ― に陥るという経験である。しかし、それが有意味なものとなるには、聖コンスタンティヌスを媒介させることで、危機的状況からドラマティックに回復し、その返礼をするという一連の「救済のドラマ」として語られなければならない。なぜなら、語りうるものとされてはじめて、人びとの経験の内部に統合されうるものとなるからである。小田亮も指摘するように、不慮の災害にみまわれたという切実な経験は、「語られて統合されてはじめて日常的秩序（ノモス）から外れた」、異常な出来事となる[3)]。いいかえれば、実証主義的な因果関係の語りに対して、不可視の力という「レベル」の異なった規範の語りによって、「異常なもの」として現れてくるのである。この「異常」を偶然ではなく必然に換えるのが「救済のドラマ」である。よって、日常的な対処法で解消しえない問題か否かはさして重要な意味をもたないし、聖コンスタンティヌスの「恩恵 grazia」「奇蹟 miracolo」も物語に外在するものではない。

このように出来事は、偶然性から必然性へと転換されてはじめて「救済のドラマ」という物語となる。そして、その形態は〈欠如〉→〈欠如の解消〉という最も単純なものである。しかし、すべての不測の事態が〈欠如〉となって、聖コンスタンティヌスの介入が要請されるわけではない。お堂の壁面や柱を覆い尽くす ex voto（エクス・ヴォート）の語りを拾っていくと、その原因が何

であれ、「わたしがここにいる」ということがそうでなくなるという状況 ― 現存在の喪失の危機 ― が、「救済のドラマ」を始動させている。そして、実存の次元における〈欠如〉という発端だけが、結末に不可視の力による防衛と補償を督促している。

もし、「救済のドラマ」を実存の問題と捉えれば、危機にあってもこの世界で生きつづけようとする意志、自己存在の喪失への抵抗のあらわれであり、現存在の世界への定着の物語であると解釈することができる。それは「監視人の監視はだれがするのか」という問題へと向かわせる。おそらく、「民間信心」というカテゴリーで一括される、人びとの「もののやりかた」は、この〈欠如の解消〉のしかたに刻印されているはずである。

3 「呪術的知」の相似形

ここで少々強引かもしれないが、デ・マルティーノが解釈する「呪術的世界における実存のドラマ」と聖コンスタンティヌスの「救済のドラマ」を並べてみる。それは「呪術知」と呼ばれると人びとの日常的な「もののやりかた」との連続性を問うことにもなる。つまり、「呪術知」を「近代知」に対置される前近代的な考えかたとするのではなく、「救済のドラマ」を制作する「もののやりかた」との構造的同一性があるのか、その「質」を確かめるのである。もちろん、「つぎつぎに事実（fatto）の惰性を突き破って、それらを人間たちの行為（fare）と製作（plasmare）の現場へと引き戻してゆく」、ひとりの民族学者の徹底した「知のありかた」の追究にはるかに及ばないだろう。だが、「所与の個人」という前提がなおも「課題」である「実存のドラマ」の自己相似な図を「救済のドラマ」のなかで素描することはできるかもしれない。

デ・マルティーノは、「自らが現存在として存在しえなくなる」という不安が、危険に転化するとき、「呪術知」が出現し、防衛と救済のドラマ

が制作されると述べる。

> いまここに存在しつづけようとする抵抗があるからこそ、現在意識の崩壊はひとつの特徴的な不安のなかでとらえられる危険に転化するのである。また、この危険が立ち現われるからこそ、現在意識は一定の文化的諸形式の創造を介する自己救済の任務につくことができるのである。補償なしに崩壊してゆく現在意識には、呪術的世界はまだ現れておらず、現在意識が救済され自己を確立して、もはや自己の不安定さを感じとらなくなってしまったときには、呪術的世界はすでに消滅している（De Martino［1973：74］，上村［1988：23］）[4)]。

呪術的世界の「実存のドラマ」は、「現存在でなくなる危険」が物語を始動させ、その危険を防衛と救済によって解消するという点で、「救済のドラマ」と同じ〈欠如〉→〈欠如の解消〉形式をとっている。また、不可知あるいは不可視の力を媒介に個人の再統合をはかるという均衡回復の装置になっている。ここで注意すべきは、個人をすでに確立された所与のもとし、全体をパノラマ的風景として統合するような見かたをしてはならないということである。デ・マルティーノの捉え方は、「近代知」をのりこえる（拡大する）ために「呪術知」を理解しようとするあまり、両者の違いを強調した二元論になってしまうのだが、その解釈には耳を傾けるべきところがある。ひとつは、すでに確立された個人を所与のものとする前提を批判して次のように述べる点である。

> 精神的力の概念も物理的力の概念も、ともに、現在意識が保障されて危険もなく世界に対峙しているということを前提にしている。しかるに呪術的世界においては、そのような対峙は前提としてあるのではなく、なおも課題として存在しているのである（De Martino［1973：115］，

上村［1988：91］)。

もうひとつは（その前提批判から派生するものだが)、救済が「地平」という境界を与えるという点である。デ・マルティーノは「限界」という言葉を使って次のように述べる。

> われわれはひとつの文化的立場に捕らわれているため、現在意識の制限を罪と感じる。ところが「呪術的世界」においては、まさに現在意識に限界を与えることこそが救済であり、そこでは呪術的罪（「悪意」）はもろもろの限界が危険なことにも崩壊してしまうことにあるのである。ギリシア的＝キリスト教的人間学、そしてまたわれわれの文明に生来的なものである反呪術的論争は、この呪術的世界とのあいだに深い溝を掘り、断絶を作り出してしまった（De Martino［1973：161］，上村［1988：173］)。

ここで「実存のドラマ」の構図をまとめておくと、パノラマ的全景のなかにすでに保障された個人の「欠損」を不可知な力に埋めてもらって均衡を回復するというものではなく、自分をふくむ「前景」（同一空間にいるという直接性）の喪失に「地平」という境界を与えてもらうことによって、その身を維持しようとするものである。では、「救済のドラマ」はどうか。〈欠如の解消〉の「質」をみれば、「実存のドラマ」と構造的には同一のものである。聖コンスタンティヌスの「恩恵」「奇蹟」を不可視の力とすれば、それが及んだ（あるいは及んだことを示す）モノが、そっくりそのまま返されるという行為が、「呪術知」の相似形を暗示している。中心からの一方的な「恩恵」「奇蹟」の配分ではなく、贈与と返礼という相殺関係によって、〈欠如の解消〉が示されるからである。

このような限定交換の形式には、すでに述べたように、不動の中心点は

ないため、従属関係は成立しない。とすれば、実存のレベルの〈欠如〉は、すでに確立した個人という統合体の欠損というよりも、自分をふくむ「前景」の喪失の危険と考えられる。いま・ここにある「地平」に一気に呑みこまれそうになる危険に抗して、不可視の力（「呪術知」では不可知の力でもある）を媒介させ、「境界」を確立することが〈欠如の解消〉、つまり「救済」なのである。そして「前景」が戻れば、不可視の力はここでは余分なものとして「外部」に排出される。不可視の力は「消費」されるのではなく、「剰余」を徹底して避けるために、破壊されると言ってもよいだろう。これが、聖コンスタンティヌスの「恩恵」「奇蹟」を利用した「救済のドラマ」の構図である。

「実存のドラマ」と「救済のドラマ」の相同性をしつこく述べたのは、「前近代的なもの」の残滓としてのりこえたり、「ローカルなもの」として特別扱いしたりせず、生活世界における「救済のドラマ」という切断面を考えてみたかったからである。だからといって、「呪術知」と「近代知」が断絶していないと主張するつもりはない。切断しなければ「近代知」は出現しないからである。また、「民間信心」として一括される人びとの日常的実践行為のすべてが、「呪術知」によるものだと述べるつもりもない。その多くは単なるシステムの模倣にすぎないからである。しかし、システムを利用するしかない人びとの受動的能動性が発揮される「もののやりかた」の質（模倣ではなく変換であること）を見極めれば、「呪術知」との連続性を問うてみることはできるのではないだろうか。

Ⅳ　断絶のなかの連続性

1　ツリーのなかのセミ・ラティス

本小論はグラムシのフォークロア概念、ド・セルトーの日常的な「もののやりかた」という概念をヒントに、聖コンスタンティヌスへの奉納行為

をカトリシズムに包摂された「普通の人びと」のシステム「領有」による実践と捉えることから出発した。そして、システムとは別の原理によって「救済のドラマ」は制作されていること、その「もののやりかた」にはデ・マルティーノの解釈する「呪術知」と類似していることを指摘した。そこでここでは、聖コンスタンティヌスへの奉納行為にあらわれる「文法構造の変換」の素描（一般化ではない）を試みたい。

先にも述べたが、聖コンスタンティヌスへの奉納行為は、システムの模倣ではなく、変換であることは、聖人と奉納者の関係が、再分配ではなく限定交換に規定されることによって示される。すなわち、互酬性（贈与と返礼）に規定される両者の関係が、特別な中心＝神との従属関係の写像ではなく、同質なものの並列（類似）となるのである。ただし、この互酬性は、あくまで全域的な価値基準を前提とした局所的な相互性にすぎない。全域的な等価基準を規定する原理はひとつでなければならないからである。このような再分配の互酬性への一時的変換をシステム構造のモデルで捉えると、ツリー状の位階構造の一部のセミ・ラティスへの変換と言えるだろう。

市川浩は、ツリー構造の特徴は各カテゴリーあるいは集合が、一方が他方に完全に含まれるか、互いにまったく無関係（重ならないこと）であるため、ふたつの集合のオーヴァーラップ、重なりあい、そこから派生する両義性は本来許されないと述べる[5)]。それに対して、セミ・ラティス構造のほうは、集合が重なりあうため、多義性が発生することを認める柔軟性があり、生活世界ではツリー型のシステムの裏システムや補完システムになる[6)]。たとえば、集合（３４５）を構成する要素３は、ツリー構造では一義的な役割機能に固定されるが、セミ・ラティス構造では要素３は集合（３４）（２３４）（３４５）（３４５６）のいずれでもある（図３、図４）。つまり、明確に定義されない曖昧な役割の重合が形成されるのである。生

活世界にあらわれる聖人は、さまざまな情況に応じる伸縮自在な（非-中心化された）存在、まさに裏システムである。

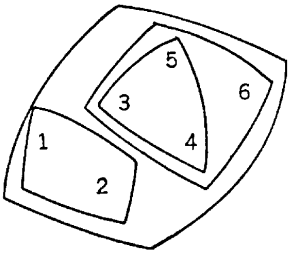

図３　ツリー構造の集合

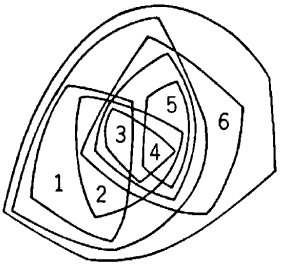

図４　セミ・ラティス構造の集合

ツリーの一部のセミ・ラティスへの変換は、テクネーという概念＝意味に対してあらわれた、ブリコラージュという記号のなせるわざである。単一のシステムを利用するしかない「普通の人びと」によって、生活世界で実践される意味のずらし、創意工夫と言ってもよいだろう。変換操作がすでにあるものを組み合わせること、つまり意味作用でしかない以上、その「暗黙の規則体系」は認識の様式としてのレトリックにあらわれるはずだが、素材を用いた詳細な検討は稿を改めて行いたい。ここでは、システムの模倣ではなく変換となる日常的な「もののやりかた」は、類と種のような概念の外延の含有関係とも、明確に定義される属性のような内包的意味関係とも異なる、類似、共存、相互関係にもとづく比喩を必要とするとだけ言っておこう。

2　「地続き」の思考

「普通の人びと」の日常的な「もののやりかた」は、「強者」のうちたてた秩序のなかや他者の領域で、「弱者」がなんとかやっていく技であり、創意工夫であることは、すでに述べたとおりである。ド・セルトーは、こ

うした営みを消費者の日常的実践に見いだすのだが、それは現代に限らず、時代や地域をこえた「ある一定の形式」として連綿と続くものだと考えているようである。

> おそらくこうした営みは、太古の昔からある技芸（アール）に通じるものであろう。史上相次いだ社会的政治的秩序という制度を横断してきたばかりでなく、有史以前までさかのぼり、人類という境界線のこちら側と不思議な縁（えにし）をむすびあっている技芸に。事実こうした実践は、あたかも記憶なき昔から生きつづけている知恵のように、ある種の魚や植物がみごとな妙技をもって見せてくれる擬態やしぐさや芸当に妙に似通っている。このような技芸の手続きは、生者の世界をこえたその向こうにも見いだされるものであろう。まるでそれは、歴史上にうちたてられた諸制度による戦略的分割のみならず、意識という制度そのものによって設けられた分裂をものりこえて生きつづけているかのようだ。それらは、ある形式が連綿と絶えることなく存在しつづけ、はるか海の底からわれわれがメガロポリスにいたるまで、言葉なき記憶が脈々と生きつづけていることをあかしてくれる（ド・セルトー［1987：107］）。

ここで「地続き」の思考と呼ぶのは、「ブリコラージュ」あるいは「戦術」タイプの「もののやりかた」の連続性（ド・セルトーが指摘するような）を強調したものであり、人間の思考の基底性（「基本構造」）のようなものである。もっとも、レヴィ=ストロースが人間の普遍的な思考とした「野生の思考」と区別しているわけではなく、歴史的系譜やシステムの「外部」をイメージさせる「野生」という言葉を避けただけのことである。

さて、この「地続き」の思考をなぜいま持ちだすのかといえば、人びとの「もののやりかた」がシステム（「未開」社会の場合は自然）からの引用でしかないからであり、そこに「ブリコラージュ」の連続性をみるから

である。ある図形の部分が全図形の縮小された像になっているものを自己相似な図形というが、システムを「領有」する人びとの「もののやりかた」は、まさにそのミニアチュールである。ただし、ここで注意すべきは、自己相似な図形の構造の区別である。「ブリコラージュ」はその真偽ではなく、思考のスタイルによって区別される。「地続き」の思考と密接に結びついたスタイルは、自己相似な図形でたとえるならば、縮小された写像の列が一点に収束しない（全体がそのいくつかの縮小写像から成り立っている）図を描くと考えられる。それに対して、カトリシズムのようなシステム原理は、最終的には一点に向って収束するような図を描くと言えるだろう。縮小の不動点が〈一〉か〈二〉は大きな違いなのである[7)]。

聖コンスタンティヌスへの奉納行為は、カトリシズムの縮小写像のようにみえるが、「救済のドラマ」という「実存の次元」では、還元不能な複数性となっている。人びとが聖人との関係をブリコラージュするからである。このように「地続き」の思考がひょっこり顔をだす「次元」が、カトリシズムに限らず、システムに包摂された人びとの生活世界における〈いま・ここ〉の実践にあるはずである。たとえ行為者が奉納者、消費者、少数民族など、ばらばらであったとしても、その日常的な「もののやりかた」を注意深く選りわけながら検討を重ねていけば、システムの思考スタイルとは異なる思考スタイル（システムの自己拡大や隠蔽によって構築されたものではない思考）の発見につながるのではないだろうか。「地続き」とはまさにそのような意味でもある。

V　おわりに

「二元論が近代において「発明」されたものだという指摘や、二つの項は連続的なもので明確には分けられないものだという指摘も、すでに共有されている認識」になっているにもかかわらず、本小論では、システム／

生活世界、システムの原理／人びとの「もののやりかた」、システムの思考／「地続き」の思考、テクネー／ブリコラージュ、同一性／非‐同一性といった二つの項をあえて対置させてみた。それは、二元論を妄信しているからではない。二元論批判の依拠する前提、つまり、「近代の支配的なシステムとその内部に構築された外部」という捉えかたにも、そうした二元論に依拠して「外部」を実体化してしまうことへの批判にも、異論はなく、むしろ同意している。しかし、小田亮が的確に指摘しているように、「構築された外部」による「外部」の隠蔽を二元論批判は見落としていると言わざるを得ない[8)]。もちろん、境界や起源に先行する「真実の外部」が存在していたという意味ではなく、「外部」の発明によって「見えなくなった何ものか」、そうした「外部」とは「異なる何ものかの消滅ないし維持」によって明らかになるものに気がつかないということである。

本小論は、支配的なシステムのツリー構造によって見えなくなってしまったもの－「地続き」の思考－を、生活世界における人びとの日常的実践、すなわち、システムの「領有」「変換操作」のやりかたに見ようとする試みであった。その手始めに、カトリシズムと「民間信心」という「正当な位置」をそのなかで与えられている奉納行為を具体的材料として、支配的な思考スタイルとの断絶のなかの連続性、切断面の連続性という二重性を問うてみたのである。

さて、こうした「地続き」の思考へのこだわりが、二重性への着目に向わせ、人びとの日常的実践に執着させることになるのだが、先でも注意を促したように、すべての「もののやりかた」＝「地続き」の思考というわけではない。「真正性の水準」の区別が必要となってくる[9)]。残念ながら、本小論では「真正性の水準」について詳細に述べることはできなかったが、簡単にいえば「もののやりかた」の真偽の区別ではなく、そのスタイルの違いを明確にすることである。この根本的な区別の概念とその導入につい

ては、稿を改めて論じる必要があるだろう。ひとつの縮小図像を何度も合成（反復）するなかでしか、新しい縮小写像を見いだすことはできないからである。

注

1） Gramsci は「すべての人間は〈考える人〉である」という原則にたち、民衆もエリートと同じように「哲学者」であるとする。両者の違いは、「質」ではなく「量」(「一貫性」「論理性」「同一性」などの大小）にあると考えている。

2）カトリックでは、原則として ex voto は返礼としてのみ、納められるモノである。しかし、中世までは、神の怒りを鎮める目的と神への感謝の目的の両方があった。キリスト教以前の犠牲、供犠は、キリスト教化のはじまりとともに、 devozione 「信心」にシフトし、そして culto 「崇敬」に吸収されていくと考えられる。

　たとえば、本稿で扱ったセディロの聖コンスタンティヌスへの ex voto（1900年から1987年までに奉納されたもの）の調査記録（Maria Margherita Satta［2000］）をみると、規格製品のハート型、奉納絵、写真のモンタージュ、刺繍などさまざまである。筆者が現地で見たもののなかには、ハート型＋奉納者の写真や事故の現場写真＋聖人カードといった組み合せも多かった。

3）小田［1986：177］。

4）上村忠男氏による翻訳は第２章のみの抄訳である。本稿では訳文を適宜修正しているが、該当箇所を併記しておく。

5）身の成層的統合の図式に、建築家クリストファー・アレクサンダーが〈ツリー〉と呼んだモデルを対応させる（市川［1993：109-112］）。

6）生活世界に柔軟に対応するモデルに、アレクサンダーの〈セミ・ラティス〉を対応させる（市川［1993：112-116］）。

7）一点に収束しない縮小写像を一次元の線分で説明すれば、一つの線分から真中の３分の１を取り去り、次いで残りの線分から３分の１をそれぞれ撮るという操作をくりかえすことになる（山口［1986：149-161］）。

8）小田［2003：1-7，22-23］。

9）ベネディクト・アンダーソンの示唆する「想像のスタイルの区別」(「共同体は、その真偽によってではなく、それが想像されるスタイルによって区別される」）は、レヴィ=ストロースの「真正性の水準」の区別に対応する。ネイション以前の王国や部族などの共同体では、一度も会ったことのない人々と自分を結びつける絆は、主従関係や親族関係などの連鎖をたどって広がる

ネットワークとして想像されているのに対して、ネイションはそうではない。「出版資本主義」に媒介されたネイションは、同じ「国語」によって同じ出版物を同じ時間に読むという経験をしているという空虚な均質性をあらかじめ創りだすことによって、いきなり抽象的な全体として想像されているということなのである（小田［2008：304-305］）。

小田によれば、属性や役割に還元できない、比較不可能で代替不可能な人柄を「全体的に、大づかみに」、複雑性をそのまま理解するためには、近代社会のなかに「真正性の水準」の区別を導入しなければならない（小田［2008：299-300］）。

参照文献

Cirese，A.Mario

1976　“Concezione del mondo，filosofia spontanea e istinto di classe nelle Osservazioni sul folklore di Antonio Gramsci［1969-1970］”，*Intellettuali, folklore, istinto di classe　Note su Verga, Deledda, Scotellaro, Gramsci*，Einaudi

De Martino，Ernesto

1973（1988）　*Il mondo magico*，Bollati Boringhieri.（『呪術的世界　歴史主義的民族学のために』上村忠男抄訳：平凡社）

Gramsci，Antonio

1950　“Osservazioni sul folclore”，*Letteratura e vita nazionale*，Einaudi

Rivera，Annamaria

1988　*Il mago, il santo, la morte, la festa – Forme religiose nella cultura popolare*，Edizioni Dedalo

Satta，Maria Margherita

2000　*I miracoli per grazia ricevuta – Religiosità popolare in Sardegna*，Editrice Democratica Sarda

アンダーソン，ベネディクト（白石さや・白石隆訳）

1997　『増補　想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版

小田亮

1986　「災因論と法・占い・モノ語り」『社会人類学年報』12：169－184

1989　『構造主義のパラドックス　野生の形而上学のために』勁草社

2001　「生活世界の植民地化に抗するために ― 横断性としての「民衆的なもの」―」『日本常民文化紀要』22：1-43

2003　「二元論とその批判が隠蔽すること ― あるいは「抵抗」という概念

について—」『社会人類学年報』29：1-26
2008　「「真正性の水準」について」『思想』12：297-316
ド・セルトー，ミシェル（山田登世子訳）
1987　『日常的実践のポイエティーク』国文社
松田素二
2009　『日常人類学宣言！　生活世界の深層へ／から』世界思想社
見田宗介
1995　『現代日本の感覚と思想』ちくま学芸文庫
宮川淳
1975　『引用の織物』筑摩書房
モース，M（有地亨、伊藤昌司、山口俊夫訳）
1973　『社会学と社会人類学Ⅰ』弘文堂
山口昌哉
1986　『カオスとフラクタル　非線形の不思議』講談社ブルーバックス

（文学研究科准教授）

SOMMARIO

“Pensiero presente” in tutti gli uomini
— le pratiche inerenti alla vita di tutti i giorni —

Yasuko IMOTO

In questo breve saggio si cerca di dimostrare una certa continuità del “pensiero selvaggio”, il quale dovrebbe essere “presente” in ttui gli uomini, sia contemporanei che antichi, esaminando le pratiche del popolo (o degli individui) aderente alla vita ripetitiva ed inconscia. In tali pratiche come “l’invenzione del quotidiano”, si potrebbe osservare il fuzionamento ed il principio del pensiero allo stato cosidetto “naturale” o “spontaneo”, il quale è alla base di ogni pensiero, per meglio dire un attributo universale della logica “bricolage”.

Come punto di partenza teorico, si presentano diversi concetti : “concezione del mondo” definito da Gramsci, “tattiche” contrapposte alle “strategie” di De Certau, un dramma della “crisi della presenza” di De Martino ed “bricolage” come scienza del concreto di Levi-Strauss. Per indagare e descrivere la continuità del “pensiero selvaggio” che ci sembra un enorme distacco dal nostro, si presuppone questo quadro di riferimento teorico. E poi, tra le pratiche da esaminare, le quali ci accennano certe tracce di tale principio del pensiero, si sceglie un fenomeno di ex-voto dedicato a San Costantino (Sedilo in Sardegna), considerato ufficialmente “pietà popolare”.

Questo saggio viene diviso in quattro parti : premessa in cui si dà un schema di argomento, la prima parte in cui si spiegano diversi concetti di base, la seconda in cui si descrive come si agisce su un territorio “altro”, ricombinando regole e prodotti già “familiari” agli individui, la terza in cui, dalle osservazioni su un processo di fare-sciogilere il voto a San Costantino, si deduce una certa discontinuità-continuità del pensiero, e l’ultima parte in cui si propone un argomento sulla distinzione del “livello di autencitità”, del cui concetto ci dovrebbe rimanere ancora da sviluppare.

キーワード：日常的なもののやりかた、戦術、ブリコラージュ、領有、
思考の非連続性と連続性